

気鋭の神経科学者ネルソンが 体脱体験と臨死体験を探究する

最新の生理学や脳科学の知見を動員し、謎の最奥に挑む

石川幹人

ケヴィン・ネルソン 著
小松淳子 訳

▶ 死と神秘と夢のボーダーランド

死ぬとき、脳はなにを感じるか
2・20刊 四六判360頁 本体2300円
発行：インターシフト／発売：合同出版



神秘体験の探究をまた一歩進める貴重な文献が翻訳出版された。気鋭の神経科学者ネルソンが、神秘体験のなかでもきわだって多く報告される体脱体験と臨死体験に注目した著書である。

体脱体験は、おもに睡眠時に身体から自己が抜け出して、天井あたりから自分の身体を見つめるという体験である。一方の臨死体験は、事故や病気で瀕死の状態におちいった人が、しばしば体脱体験を伴いながら「あの世」をかいま見る体験である。霊魂に思い入れのあるスピリチュアリストにとっては、まさに靈魂や霊界の実在を証明する貴重な体験群に相当する。

本書の優れた点は、体験としての内的な現象面をとりえてその意義を尊重しながらも、最新の生理学や脳科学の知見を動員し、謎の最奥に挑む科学的姿勢にある。

睡眠時に見る夢の中には、自らそれを夢と自覚し、さらには夢の内容を意図的にコントロールできる種類のものがある。それは「明晰夢」と呼ばれるが、その現象面には、

体脱体験と共通した特徴が見られる。臨死体験の現象面については、失神時のそれと比較され、臨死体験に特異的な特徴があまり出されていく。

こうして、体脱体験と臨死体験それと明晰夢はどれも、覚醒状態、睡眠状態、夢見（ム睡眠）状態に次ぐ、第四の精神状態に相当することがじよじよに明らかになっていく。そしてネルソンの追究は、覚醒状態を維持する交感神経系と、睡眠状態を誘導する副交感神経系が、交互に働くスイッチ作用に到達する。

通常人間は、覚醒状態では睡眠が抑制され、逆に睡眠状態では覚醒が抑制されるなどと、両神経系のホルモンが互いに調節し合っている。彼の仮説では、第四の精神状態においてこの調節機能が失われ、交感神経系と副交感神経系がともに高まるという事態が起きていると見なされる。

つまり、レム睡眠のまま覚醒状態を伴うのが明晰夢であり体脱体験であるとき、覚醒状態にレム睡眠侵入が起きるのが臨死体験であるといえる。多くの証拠から築きあげ

た、見込みのある仮説として高く評価できる。さてそれでは、体脱体験や臨死体験がホルモンに特徴づけられた第四の精神状態で体験されるとして、それは脳内現象にすぎず、体験は幻想や幻覚のたぐいとして片付くのだろうか。まさにここが、自然科学者とスピリチュアリストの論争点である。

本書では生理学に立脚した議論が多くなされ、脳内現象説を支持する様子が見られるが、この論争を決着させようという意図までは見えない。スピリチュアリストとしては、「第四の精神状態においては、はじめて靈魂が身体から抜け出る態勢が整うのだ」と解釈できる余地が残る。

スピリチュアリストが、臨死体験や体脱体験が靈魂離脱の証拠であると見なす重要な事実が他にもある。それは、瀕死の状態におちいった患者が、体脱して手術中に自分の身体になされた処置や、少し離れた手術室内の様子を見て戻り、麻酔から覚めてからその体験を語った多くの事例があることだ。

これらの事例に関してネルソンは、「患者が推測にもとづいて架空の記憶を形成したのだ」と解釈している。しかし、本書では触れられていないが、超心理学では体脱体験をうながし、体験時に天井の棚に載せてある絵を見て帰るという実験を行っており、無視できない数の成功事例が

あるのだ。となると、論争はここから本格的にスタートするとも言える。評者は、脳内現象でも靈魂離脱でもないところにこの論争の決着点があるように思えてならない。拙書『超心理学』（紀伊國屋書店）でも論じているが、超心理学実験の積み重ねから、次の諸点が示されている。

第一に、体脱体験者は体脱を体験していないときも透視能力が高いこと、第二に、夢見状態に誘導すると透視能力が高まること、第三に、透視能力はふつう覆い隠された絵でも当てられること、が判明している。

これらの知見を総合すると、第四の精神状態は透視能力が高まる精神状態なのかもしれない。透視は、脳内に閉ざされた現象ではないし、靈魂が浮遊してそれが「見て帰ってくる」ような疑似物理的現象でもない。透視は、身体の外側に拡がる意識の知覚力として特徴づけられるわけだ。

神秘体験は、身体的な制約が緩和されたボーダーランドへと、意識が至る道すじを明らかにする。その体験を単なる幻想や幻覚だと終わらせることなく、新たな究明への道しるべとして捉えたい。本書でネルソンが議論した数々の科学的知見は、その手がかりとして見つめ直すと、ますます輝いて見えてくる。（明治大学情報コミュニケーション学部長）